

文化芸術の鑑賞活動

—学校教育での映像オペラの活用—

鈴木 満由美
日本大学大学院総合社会情報研究科

Cultural Arts Appreciation Activity

—The use of cinematic opera in school education—

SUZUKI Mayumi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

I hope for the spread of opera appreciation. All members can experience it, if they appreciate it in junior high school. Cinematic opera can be appreciated in the classroom.

Students learn the story and the background and they watch an important and the last scene of cinematic opera. For example, 'The Magic Flute', 'Aida', 'Carmen', etc. Through opera, human relations and history and morality can be learnt. It leads to life long learning.

The purpose of this report is to utilize cinematic opera for the spread of opera appreciation in junior high school education.

1.はじめに

文化芸術の活動、たとえば、オペラ鑑賞といえば、劇場まで足を運ぶのが一般的だった。オペラを上演できる劇場が近くにない地方在住者にとって、観に行くことは難しい。また、休憩を含め4時間前後の上演であるため、内容を知らないと退屈してしまうかもしれない。構えなければ、鑑賞は難しい。それゆえ、オペラ鑑賞をする環境を整えるのは簡単なことではなかったのである。

劇場も映画館も近くにない中学生に、「オペラを観たことがありますか」と学級で尋ねると、4、5人の生徒が「ある」と答える。しかも、ほとんどの者は「テレビで観た」と答えるのである。このように、オペラは劇場ではなく、テレビで鑑賞する方法が普及してきた。字幕もつくし、洋画をテレビで観る感覚なのである。映像オペラには、オペラ映画とライブ映像とがある。オペラ映画は吹き替えを使い、スタイルのよい美男美女が映る。大自然の中でロケーションを行い、背景がわかりやすい。それに対し、ライブ映像は、劇場での上演を録画したものである。ライブの数だけあると思えるほど、DVDはたくさん

販売されている。

2006年12月、オペラ鑑賞の新しい形が登場した。それは、MET ライブビューイングである。2003年にシネマ歌舞伎を開発した松竹が、MET（ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場）で、収録されたオペラ公演映像をスクリーン上映する。松竹の説明によると、「HD（High Definition）映像上演と6チャンネル音響再生の最高の環境と技術を駆使」¹しており、日本語字幕もついて、まるで最前列で観劇するようなクリアさを感じることができるという。

ITの発達に伴い、小・中学校の現場でもビデオやDVDが頻繁に教材として活用できるようになってきた。小・中学校は義務教育である。音楽教育において、全員が学ぶ最後の場であるところに意味をもつ。書物に掲載されている写真は平面であるのに対し、ビデオやDVDは立体的に映し出し、音響や動画で確かめられる。実体験しなくとも、疑似体験に近い形で理解を促せるメリットがある。

DVDやビデオさえあれば、学校でも自宅でも、時と場所を選ばず、オペラ鑑賞ができるようになったのである。

本稿の目的は、文化芸術の鑑賞活動、とくにオペラ鑑賞の普及のため、義務教育の中に映像オペラを取り入れることを提言するものである。

本稿では、日本のオペラ団体の上演と鑑賞の現状と教科用図書に記載された作品の分析を行う。日本で人気のある、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）と、ナポレオン以降の作品とその創作されたころの時代背景を調べ、学習指導要領に合わせた鑑賞の効果を考察し、映像オペラの活用の提言をしていくことにある。

2. 日本のオペラ団体の上演と鑑賞の現状

日本を代表する歌劇団に「藤原歌劇団（1934）」と「二期会（1952）」²がある。演目的特色において、前者はイタリアオペラが7割をしめ、後者はドイツオペラが5割をしめる。両劇団とも東京を根拠地としている。

2.1 上演演目

表1 上演演目のベスト5

藤原歌劇団		二期会	
ヴェルディ	椿姫	モーツァルト	フィガロの結婚
プッチーニ	蝶々夫人	モーツァルト	魔笛
ビゼー	カルメン	Jシュトラウス	こうもり
プッチーニ	トスカ	ビゼー	カルメン
プッチーニ	ボエーム	モーツァルト	ドン・ジョヴァンニ

（「藤原歌劇団VS二期会」より作表）

藤原歌劇団では、『椿姫』『蝶々夫人』『カルメン』をよく演奏する。5曲のうち、『カルメン』以外は、イタリア人により創作された作品である。

二期会は、レパートリーが広くいろいろな演目を上演している。イタリア人による作品は5曲のうちにはないけれど、『フィガロの結婚』と『ドン・ジョヴァンニ』はイタリア語で上演する。

2.2 日本の歌劇団

藤原歌劇団は、約1000名の団員・準団員を有し、人気の外国人歌手と共演を行い、年に4回から5回

の公演を行っている。アミルカレ・ボンキエッリ（1834-1886）の『ラ・ジョコンダ（1876）』の公演の様子は、2009年7月にテレビで放映された。

二期会は約2300名の会員・準会員を有し、年5回のオペラ公演のみならず、声楽全般の振興を図っている。日本の芸術文化の発展に寄与することを目的に各種事業を行い、その中に、オペラ入門コンサートや子ども向け教育プログラムを有し、学校公演もしている。

大阪にも老舗歌劇団として、「関西歌劇団（1947）」³と「関西二期会（1964）」がある。「関西二期会」は二期会関西支部として出発し、約500名の会員を要し同様な活動を行っている。「関西歌劇団」90回の定期演奏のうち、ヴェルディの作品が24回、モーツァルトの作品が17回と続き、イタリアものが7割を占める。上演演目は『椿姫』、『カルメン』、『蝶々夫人』、ピエトロ・マスカーニ（1863-1945）の『カヴァレリア・ルスティカーナ（1890）』が多い。

2.3 わが国におけるオペラ制作の現状

根木昭の「わが国におけるオペラ制作の現状と課題」という先行研究がある。藤原や二期会などの「制作団体」は任意団体が多く、組織基盤は脆弱である。二期会は財団法人になり、自前のホールを持つけれど、大部分の団体は国や地方公共団体の直轄による「ホール」を利用している。

約75%は、歌手、指揮者等の団員または会員を有し、合唱団やオーケストラ等を有するところもある。オペラ公演は、「制作団体」の主催または共催公演が約80%を占めている。それゆえ、ここから、オペラの発信をしているといっても過言ではない。

そして、「1制作団体当たりの観客動員数も、過去に変動はあるが、2001年には3,437人となっている。また、観客の性別・年齢別構成は、男女比1対2、40歳以上が3分の2弱を占めるなど中高年の女性市場となっている。略。1公演当たりの収入は、入場料収入が4割強、公的な助成金が2割強、民間の助成金が1割強である」⁴とある。

2.4 わが国におけるオペラ制作の課題

そのため、公的な支援がないと、公演は難しいの

である。

そのうえ、地域差は大きい。首都圏におけるオペラへの関心は高まってきており、チケットは比較的好調に売れてきている。しかし、関西ではなかなか売れず、出演者自らのチケット販売の依存度は依然として高い。演目設定には、鑑賞者を意識した人気や知名度などが考慮される。

また、「東京、関西とも、若年層や初めての来場者の把握が今後の問題であり、学校への普及公演等を通ずる若年観客層の掘り起こしやリピーターの確保に関心が向けられている」⁵のである。

オペラの普及のためには、学校教育を巻き込んだ鑑賞の方法が問われている。高等学校では音楽科は選択制となっている。したがって、学校教育で音楽科を全員で学ぶのは中学校3年生までであり、義務教育での鑑賞の充実が望まれるのである。

3. 教科用図書に記載された作品の分析

中学校2年生用音楽科の教科用図書の巻末には、「西洋音楽史」を学ぶため、おもな作曲家とその作品が一覧となって記されている。

3.1 学習指導要領

中学校3年間で、音楽科の授業は115時間である。総授業時数2940時間中の約4%にすぎない。中学校学習指導要領の音楽科鑑賞内容には、「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞すること。我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること」⁶と記載されている。

そして、「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」⁷という中学校第2学年及び第3学年の目標は、生涯学習への第一歩となるのである。

そこで、まず、歴史と関連づけて、分析してみる。小学校から高等学校までの教科用図書を調べて、本文に記載されたオペラとその創作年と歴史的な主なできごとを作表してみた。

3.2 教科用図書に記載された作品

表2. 教科用図書に記載されているオペラ作品

演目	創作年		おもなできごと
オルフェオ	1607	中2	
フィガロの結婚	1786	高1	10代徳川家治死没
魔笛	1791	小6	大黒屋光太夫、エカチェリーナ2世に謁見
セビリアの理髪師	1816	中2	
魔弾の射手	1821	中2	
ウィリアム・テル	1829	中2	
タンホイザー	1845	中2	水野忠邦老中辞職
ローエングリン	1850	器楽	
リゴレット	1851	中2	太平天国の乱
椿姫	1853	中2	ペリー来航
アイダ	1871	中2	ドイツ帝国成立、廃藩置県
こうもり	1874	中2	民選議院設立の要求
ボリス・ゴドゥノフ	1874	中2	
カルメン	1875	中2	樺太・千島交換条約
ホフマン物語	1881	器楽	国会開設の勅諭
オテロ	1887	中2	仏領インドシナ連邦設立
ボエーム	1896	中2	近代オリンピックがアテネで開催
トスカ	1900	中2	
蝶々夫人	1904	中2	日露戦争
メリー・ウィドウ	1905	高2	ポーツマス条約
エレクトラ	1908	中2	
ばらの騎士	1911	中2	辛亥革命、関税自主権の回復

(教育芸術社『中学生の音楽2・3上』等より作表)

3.3 作曲家と作品

オペラを多く創作したおもな作曲家は、ドイツ語圏では、オーストリアのモーツァルト(1756-1791)、ジャック・オッフエンバック(1819-1880)、ヨハン・シュトラウス(1825-1899)、ドイツのワーグナー(1813-1883)、リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)である。

イタリアでは、ジョアキーノ・ロッシーニ(1792-1868)、ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)、ジャコモ・プッチーニ(1858-1924)であり、フランスではジョルジュ・ビゼー(1838-1875)が有名である。

3.4 オペラ『アイーダ』

「中学生の音楽2・3上」の教科用図書には、ヴェルディの『アイーダ』を詳細に載せている。

第1幕、戦争に敗れ、敵国エジプトの捕われの身となったエチオピア王女アイーダは、エジプトの将軍ラダメスと恋に落ちてしまった。(略)

第2幕、勝利を収めたラダメスは、華々しく凱旋する(凱旋の場)。ラダメスの頼みもあって、国王はアイーダとエチオピア王アモナズロを人質に残し、(略)、さらにラダメスに向かって、ラダメスを愛すエジプト王女アムネリスと結婚してエジプトを治めるように命じる。(略)。

第3幕、父の命令に従ったアイーダは、エジプト軍の進路をラダメスから聞き出すことに成功、(略)

第4幕、ラダメスは、生き埋めの刑を宣告され、神殿の地下牢に閉じ込められる。その中に、アイーダが潜んでいた。二人は天国で結ばれる、(略)。

作曲者と楽曲の紹介だけではなく、第2幕第2場の「凱旋の場」を中心に、この4幕オペラの全あらすじを知ることができる。カラー写真は6枚、同社準拠のCDと併用すれば、曲の雰囲気も感じとれる。CDは「凱旋の場」を中心に、第1幕と第4幕の一部を含め、20分足らずの所要時間となっている。

この『アイーダ』は、エジプト総督イスマーイール・パシャ(1830-1895)からスエズ運河開通(1869)後の近代化の国策として、エジプトを舞台にした壮大なオペラをカイロ劇場で初演するという依頼を受けて創作された。

3.5 ヴェルディとその作品

作曲家ヴェルディは、国会の下院議員(1861-1865)になった。政治に失望して1期で辞職するけれど、「VERDIなるアルファベットは、Vittorio (V) Emanuele (E), Re (R) D'Italia (DI)、すなわち、イタリア国王ヴィットーリオ・エマヌエーレの頭文字そのもの」⁸というほど国民に支持されていたのである。

それは、バビロンの捕囚(BC597)で有名なバビロニアの王ネブカドネザル2世(在C605-562)を描いた『ナブッコ(1842)』で発揮した。第3幕の合唱「行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って」を創作し、

オーストリアの支配下にあったミラノの人々を沸かせたからである。そのほか、第一回十字軍遠征を描いた『十字軍ロンバルディア(1843)』、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世(在1152-1190)をロンバルディア同盟(1167)が破った『レニャーノの戦い(1849)』など、劇場の依頼で愛国的な作品を中心に次々と創作していった。

また、劇場の依頼をうけて、1282年、住民暴動と虐殺事件を扱った『シチリアの晩鐘(1855)』、シモンが毒殺された事件(1363)をもとに『シモン・ボッカネグラ(1857)』、スウェーデン国王グズタフ3世(在1771-1792)の暗殺事件を描いた『仮面舞踏会(1859)』、悲劇の人『ドン・カルロ(1867)』と史実をもとにした台本で、年1作以上のペースで、新作を書き続けていた。

ヴェルディの作品は、支配される側の「小国に分裂し国民国家としての近代化に遅々として進まない祖国への苛立ちであり、イタリア統一への雄叫び」⁹を代弁してくれていた。そして、史実をもとにしたこれらの作品は、ヨーロッパの歴史を知るのに好い資料となる。

3.6 「愛国心」を育む教材

ヴェルディの活躍したころの日本は、幕末から明治維新のころにあたる。江戸幕府の政治が行き詰まり、近代社会を成立した欧米諸国が開国をせまり、日本でも、近代国家の基礎が整えられた。祖国を外国の支配下におかれないために、国を守ろうと富国強兵・殖産興業政策をとった。ヨーロッパに位置して近代化の遅れたイタリアと共通するところがあるのである。

中学校学習指導要領社会科の目的は、「(略)、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、(略)、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」¹⁰とある。

オペラ『アイーダ』の第2幕第2場の「凱旋の場」は音楽科の鑑賞教材としてだけではなく、愛国心を育む教材として活用できる。また、地中海沿岸諸国の地理や歴史を含む国際理解にも役に立つ。

3.7 総合芸術としての位置づけ

オペラは舞台上で衣裳をつけた歌手が歌唱で進めていく音楽と演劇と舞踊によって構成された総合芸術である。『アイダ』は、総合芸術のジャンルの中に、歌舞伎や文楽とともに書かれている。

文楽『義経千本桜』と歌舞伎『勸進帳』をモデルに説明している。あらすじはない。教材としては、一部のCDしかないようである。

オペラとしてほかに、『魔笛』の重唱曲「パパパ」や『カルメン』の「前奏曲」、『蝶々夫人』『リゴレット』『タンホイザー』をCDで紹介している。コンサートでも『蝶々夫人』の「ある晴れた日に」や『リゴレット』の「女心の歌」『タンホイザー』から「歌の殿堂をたたえよう」はよく歌われる。「パパパ」は、言葉がわからなくてもリズムを楽しめる。「前奏曲」はオーケストラのみのわずか4分でイメージを表現し、全曲165分のこのオペラの内容を暗示してくれる。

4. モーツァルトの生きたころと作品の考察

日本において人気のあるオペラは、イタリアものとモーツァルトの作品であった。教科用図書にも、中学2年生用の「パパパ」のほか、「交響曲40番ト短調」、小学5年生用に「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の8小節、小学6年生用に『魔笛』から「魔法の鈴」の16小節と載っていた。そこで、モーツァルトの生きた時代背景と作品を考察してみる。

4.1 オペラの発祥からオペラ・ブッフア誕生まで

オペラの発祥は、ルネサンス後期の16世紀末、フィレンツェで古代ギリシャの演劇を復興しようという動きから始まった。

ヤコポ・ペーリ(1561-1633)による『ダフネ(1597)』が最古の作品といわれている。初期のオペラで現存するのは、彼の『エウリディーチェ(1600)』や、ヴェネツィアのサンマルコ聖堂の楽長となったクラウディオ・モンテヴェルディ(1567-1643)の『オルフェオ(1607)』である。

専用のオペラ劇場が新設され、王侯貴族や富裕市民の社交と娯楽の場として発展した。オペラの発祥したころ、日本では「関ヶ原の戦い(1600)」を経て、

江戸時代となっていた。

オペラにはオペラ・セリア(正歌劇)という、ギリシャ神話やローマ時代などの実在人物を取り扱う英雄伝が多い。

18世紀になると、ジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ(1710-1736)は、世俗的なオペラ・ブッフア(喜歌劇)を確立した。オペラ・セリアのインテルメッツ(幕間劇)として作曲された『奥様女中(1733)』などが独立し、発展したものである。

この頃でも、イタリア音楽が最高という意識があり、各地でイタリア人の宮廷楽長が活躍した。そのため、オペラもイタリア語で書かれた。

4.2 モーツァルトの生きかた

ザルツブルク生まれのモーツァルトは古典派時代に活躍した。幼少の頃より「おもちゃのシンフォニー」を創作した父レオポルト(1719-1787)の営業で各地の王侯貴族の御前演奏で神童ぶりを披露した。

ピアニストとして人気を誇ったけれども、品行が悪かったため宮廷での就職には失敗し借金の生活だった。アントニオ・サリエリ(1750-1825)らのイタリア人の宮廷楽長たちが邪魔をしたためという説もある。オペラを21作品も創作した。

イタリア王でもあった神聖ローマ皇帝ヨーゼフ2世(1741-1790.在1765-1790)は、妹でフランス国王ルイ16世王妃となったマリー・アントワネット(1755-1793)が好んだこともあり、ドイツ音楽を意識してモーツァルトを宮廷音楽家として雇った。それゆえ、皇帝の長年の望みであったドイツ語オペラを最初に創作した作曲家となったのである。その作品は『後宮からの誘拐(1782)』である。

4.3 オペラ作品

まず、モーツァルトは史実をもとにしたオペラ・セリア『ポントの王ミトリダーテ(1770)』、『イドメネオ(1781)』、『皇帝ティートの慈悲(1791)』を創作した。歴史の流れの順に、『イドメネオ』はトロイア戦争(BC1200ごろ)後のクレタ島を舞台にした作品、『ポントの王ミトリダーテ』は敵国ローマからアナトリア半島を守ろうとした実在の英雄ミトリダス6世(BC120-BC63)を描いた作品、『皇帝ティエ

トの慈悲』は10代ローマ皇帝ティトウス（39-81.在79-81）を描いた作品である。

それらの作品は、生計を立てるため注文を受けて書かれた。『イドメネオ』はバイエルン選帝侯カール・テオドール（1724-1799）に依頼され、謝肉祭で上演するためであった。『ポントの王ミトリダーテ』はロンバルディア地方総督府長フィルミアン伯爵から依頼され、ミラノ宮廷劇場で上演するためであった。『皇帝ティートの慈悲』は神聖ローマ皇帝レオポルト2世（1747-1792）のボヘミア王としての戴冠式で上演するため、ボヘミア政府から依頼されたのであった。

日本でのモーツァルトの人気はオペラ・ブッフアの作品で支えられている。その代表三作の『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』『コジ・ファン・トゥッテ（1790）』は、ロレンツォ・ダ・ポンテ（1749-1838）の台本による。貴族を痛烈に批判した『フィガロの結婚』は皇帝のお膝元のウィーンでは不人気であったけれど、皇帝の支配下であるプラハでは大流行し、次年度のためにエステート劇場からの依頼で、『ドン・ジョヴァンニ』が作られた。『コジ・ファン・トゥッテ』は『フィガロの結婚』の第1幕に出てきた台詞から作られたので、内容が不道德と19世紀は評判が低かったけれど、20世紀になって理解が進み、今日に至っている。

皇帝の死後、ジングシュピール（歌芝居）というジャンルで、興業師エマニエル・シカネーダ（1751-1812）の依頼を受けて『魔笛』が創作された。露土戦争に敗れオスマン帝国（1299-1923）の脅威が失せ、実現した気楽な娯楽作品である。それまでの宮廷劇場と違って、一般市民を対象に創作された。シカネーダ自身が演じるブッフア的キャラクターのパパゲーノは親しみやすい。

4.4 世界の情勢

日本の時代でいえば、モーツァルトは、田沼意次時代（1767-1786）から松平定信の寛政の改革（1787-1793）のころに活躍している。日本は、天明の飢饉（1783-1787）があり、苦しい時代だった。

欧米では、ワットが蒸気機関を作り（1765）、イギリスでは産業革命が起こった。アメリカ独立宣言

（1776）、フランス人権宣言（1789）と、市民たちが目覚め始めたころであった。

オペラ創作には依頼者がおり、その当時の時代背景は無視できない。マリー・アントワネットがいなければ、モーツァルトの作品は今日まで残っていなかったかもしれない。依頼してくれる人がおらず、世に発表されなかったからである。目的に合わせて制作されたオペラ・セリアは目的外の活用は難しい。それに対し、一般市民を対象とした世俗的なオペラ・ブッフアは、時と場所を限定せず、楽しむことができる。だから、今日でも人気演目でいることができるのである。

5. ナポレオン以降のオペラ

ナポレオン・ボナパルト（1769-1821）は、フランス革命（1789-1794）後のフランスをまとめ、帝政を敷き、ナポレオン戦争（1803-1815）により、全ヨーロッパを支配下に入れた。支配下になった人々は、独立しようとまとまり、祖国を愛する作品を創作した。

5.1 イタリア

小国に分かれていたイタリアも、スペイン革命（1820）や、フランス7月革命（1830）に影響され、統一へと独立戦争を3回おこした。

第一次イタリア独立戦争（1848）は、サルデーニャ王国のカルロ・アルベルト国王（1798-1849）を中心におこした。ヨーゼフ・ラデッキー将軍（1766-1858）率いるオーストリア軍にノヴァーラの戦い（1849）で敗北した。

第二次イタリア独立戦争（1859）と第三次独立戦争（1866）は、その息子ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世（1820-1878）によりおこされた。第二次で、イタリアをほぼ統一し、イタリア王国（1861-1946）を建国した。第三次は普墺戦争と連動し、同盟国プロイセン王国（1701-1918）の勝利の恩恵によりヴェネツィアを領土に加えることができた。

ロッシーニは生涯39のオペラを作曲した。ヴェネツィアのフィニーチェ歌劇場の依頼を受け、オペラ・セリア『タンクレディ（1813）』を書き大成功をおさめる。カストラートはナポレオンが廃止して以

来、歌劇場から追放されていたため、男装アルト歌手を主役にしたのも一因だったといわれている。その後、フランス国王シャルル 10 世の戴冠に際し『ランスへの旅 (1825)』を献呈し、終身年金を得た。そして、『ウィリアム・テル』を作曲した。この歌曲は序曲が有名であり、4部構成の第4部「スイス軍の行進」は独立して演奏されることが多い。

そして、楽譜出版社のジョヴァンニ・リコルディ (1783-1853) らの支援により、ヴェルディが成功していく。

そのライバルのソツォーニョ社は新人発掘を目的に一幕物のオペラ・コンクールを開催した。そこで、1位となったのが、ピエトロ・マスカーニ (1863-1945) の『カヴァレリア・ルスティカーナ (1890)』である。このころ、貴族ではない一般庶民を主人公にして日常生活を描いたヴェリズモ・オペラが人気となった。

孫のジュリオ・リコルディ (1840-1912) は、そのコンクールで落選したプッチーニの才能に目をつけた。彼の仲介・支援により、台本作家ルイーダ・イッリカ (1857-1919) と劇作家ジュゼッペ・ジャコーザ (1847-1906) と出会い、『ラ・ボエーム』『トスカ』『蝶々夫人』を創作した。

5.2 ドイツ

ドイツにおいて、鉄血政策によりオットー・フォン・ビスマルク (1815-1898) は、プロイセン王ヴィルヘルム 1 世 (1797-1888) をドイツ皇帝 (1871) にさせた。音楽は政治と深く関係していた。

バイエルン王国 (1785-1918) のルートヴィヒ 2 世 (在 1864-1886) はワーグナーの『ローエングリン』を好み、バイロイト祝典劇場を保護した。ドイツ三月革命 (1849) に参加し、ジークフリートのモデルというミハイル・バクーニン (1814-1876) を知った。反ユダヤの彼の思想は後にナチスに利用された。このことは多くの先行研究により知るところである。

1930 年以降、帝国音楽院総裁としてリヒャルト・シュトラウスはナチス当局の要請に応じて音楽活動をせざるを得なかった。息子の嫁がユダヤ人で孫がユダヤの血筋なので、家族を守るためだった。

5.3 オーストリア

オーストリア＝ハンガリー帝国 (1867-1918) の首都ウィーンは、独立の気運におされ、多民族共生・多文化共存の方針を打ち出さざるを得なかった。皇帝の力は衰退したけれど、宮廷歌劇場とよばれた現在のウィーン国立歌劇場 (1869) やウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 (1842) の活躍は、「音楽の都」にふさわしいものであった。

ヨハン・シュトラウス 2 世は、シカネッダが建てたアン・デア・ウィーン劇場 (1801 創設) の支配人マックス・シュタイナーの依頼により、オペレッタ (軽歌劇) 『こうもり』を作曲した。

5.4 フランス

ナポレオン 3 世の第二帝政 (1852-1870) を経て、対独ナショナリズムの高揚した第三共和政 (1870-1940) となり、アジアやアフリカに植民地を形成させ、ロシアへの投資を行った。

ビゼーの『カルメン』は、歌の間を台詞でつないでいくオペラ・コミック様式で書かれ、オペラ＝コミック座 (1714 創設) で初演された。この劇場の上演様式にあわせて創作したけれども不評だったため、彼の死後、パリ音楽院の教授だったエルネスト・ギロー (1837-1892) は台詞をレチタティーヴォ (叙唱) に改作し、グランド・オペラ形式とした。イタリア初演 (1880) 以後大好評を博した。

5.5 オペラの上演

オペラの興業には費用がかかる。オペラ制作は、その劇場からの依頼と楽譜出版社による支援・育成によって行われた場合が多い。

ナポレオン以降、小国に分裂していたイタリア、ドイツは一国にまとまって独立を成就した。劇場では、時勢に合った愛国心を盛り上げる曲を依頼した。劇場の経営には、どこも宮廷や国が関係していたからである。台本がわたされ、作曲していくので、劇場の支配人の思うとおり、宮廷の考えに即した内容となる。

だから、作品に当時の世相が反映され、政治と無関係で上演できるはずはないのである。

6. 映像オペラの鑑賞の効用

DVD さえあれば、時と場所を選ばず、学校の授業の中で鑑賞できる。少しでもオペラに触れていると、鑑賞方法がわかり、生涯においても親しみやすい。

6.1 「歴史」や「国際理解」の社会科教材

10年余りまえに制作された「まんが日本史シリーズ」と世界地理・国際理解（全14巻）」というビデオがある。前者は日本テレビのビデオ原版制作をもとに、株式会社電通と土田プロダクション、株式会社バップとで制作された。アニメを楽しみながら日本史を学ぶので、生徒の反応はよい。後者は、アイジーピーの制作・著作による作品で、特徴ある自然など現地に行かなくてもその国の生活を知ることができる。

教科書をよみとるのは難しくとも、視覚、聴覚で感じとれる映像に、生徒たちは少しでも理解を深めようと一生懸命になる。

教材ビデオはその時代の政策と無縁ではない。「交流は明日への架け橋～私たちの北方領土」というビデオが各中学校に数年前配布された。企画は総務庁北方対策本部、制作は財団法人日本広報センター、HBC映画社、協力は北方四島交流推進全国会議である。領土問題を念頭に、政策上意図的に作られた作品であることが推察される。

視聴覚教材を活用するには、各教材カタログから教材を選び、市町村の予算を経て購入することになる。平成21年度社会科教材カタログの制作をみると、サン・エデュケーショナル、東映教育映画部およびNHKであった。

このように「歴史」や「国際理解」の教材ビデオは、すでに活用され、効果を得てきたのである。

6.2 オペラ作品の選定

最近、小・中学校の連携が叫ばれている。オペラ作品も、前期4年、中期3年、後期2年と発達段階に合わせて選定してみる。中学生の集中力は20分前後である。全曲では3時間前後の所要である。そこで、途中の1場面と最後の方の1場面とを鑑賞教材とし、あらすじや楽曲の説明を加えて、1時間の授業時間で鑑賞すると想定して選曲する。

表3は、現在の教科用図書に演目が記載されていること、発達段階や、学習指導要領の道徳の内容も考慮に入れ、選曲し鈴木が作表したものである。

表3. 教室でDVD鑑賞をしたいオペラ作品

	作曲家	演目	全曲の所要
前期	ロッシーニ	ウィリアム・テル	4幕 225
全期	モーツァルト	魔笛	2幕 150
後期	ヴェルディ	アイーダ	4幕 150
後期	プッチーニ	蝶々夫人	2幕 135
後期	ビゼー	カルメン	4幕 165
後期	J.シュトラウス	こうもり	3幕 150

(表2より、鈴木が選曲し作表)

6.3 鑑賞教材としての映像オペラ

劇場での観客の男女比は1対2であった。選曲において、英雄ものよりヒロインの悲劇の方を好むと推察できる女性の方が倍多い。

中学校での鑑賞は、中学校道徳の目標にある「道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養う」¹¹ことが肝要である。その内容の一つに「日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する」¹²ことを目指す。「その背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解」し、国際理解を深めることも望まれている。

しかし、オペラ鑑賞は音楽科の目標である「(略)、音楽を愛好する心情を育てる(略)、音楽文化の理解を高め、豊かな情操を養う」¹³ことをなくしては意義が乏しい。だから、音楽科教員が担当するのが最適である。音楽科以外の教科である道徳や国際理解の内容は、音楽科教員が特に説明しない。あらずじとともに字幕にする。鑑賞しない場面の舞台装置や地図を背景にして雰囲気をつかませる。これらをオペラ映画かライブ映像の該当場面と合成して、DVDの制作をすることを想定した。

ただ、他教科の内容も含むので、中学校第2学年及び第3学年の音楽科の標準時間数は、総合的な学習の時間の標準時数を減らし、45時間にすることを提言したい。

6.4 『ウィリアム・テル』の場合

前期には、この歌曲の『ウィリアム・テル』序曲の第4部「スイス軍の行進」を選んだ。

小学校第1学年及び第2学年の音楽科の鑑賞内容に「(略)、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じやすい音楽、(略)」¹⁴と記されている。

まず、第3幕の「弓矢の名手テルが息子の頭上のリンゴを射抜く」場面、なぜそうなったのかという1幕から4幕までのあらすじ、そして、序曲の最終4部「スイス軍の行進」、最後に「スイスの独立を喜ぶ」場面を観る。

舞台では序曲なので、歌っている場面はなく、オーケストラ演奏のみで、通常、幕がおりている。

この「スイス軍の行進」は運動会によく使われ、馴染み深く、身体反応に快さを感じやすい。

6.4 『魔笛』の場合

『魔笛』は大人も子どもも楽しめるジングルシュピールである。第1幕の「魔法の鈴」と第2幕の「パパパ」の部分が面白い。「より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ」¹⁵という道德内容のもと、前者では動物も踊る、後者では恋人との楽しい二重唱となる。

この作品は発達段階に合わせて、DVDの活用は幅広い。例えば、「魔法の鈴」は鑑賞のみならず、表現活動でも使える。

幼稚園教育要領の表現内容に「音楽に親しみ、(略)、簡単なリズム楽器、(略) 演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」¹⁶と記載されている。「魔法の鈴」のDVDを観ながら、一緒にリズム楽器をならし、踊って楽しむ。

小学校第1学年及び第2学年の表現内容に、「リズム譜などを見て演奏、(略)」¹⁷とある。リズム譜で練習し、「魔法の鈴」のDVDを観ながら、太鼓やすずの打楽器のリズム合奏をする。

小学校第3学年及び第4学年の表現内容に、「(略)、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと」¹⁸とある。「魔法の鈴」のDVDにあわせて、メロディを「ラララ」で口ずさむ。

小学校第5学年及び第6学年の音楽科の表現内容は「(略) 伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する」¹⁹

とある。「魔法の鈴」を好きな楽器で重奏をする。

中学校第1学年の表現内容に「声部の役割や全体の響きを感じとり、(略)」²⁰とあり、二重唱や二重奏をする。鑑賞内容に「(略) 要素や構造と曲想とのかかわり、(略) 音楽のよさや美しさを味わう」²¹とあるように、音楽を愛好する心情も育てたい。

中学校第2学年及び第3学年の鑑賞内容に「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞する」²²と記載されている。総合芸術であるオペラを、創作された背景やあらすじを理解したうえで、鑑賞する。第1幕の説明をして「魔法の鈴」、第2幕の説明をして「パパパ」を観る。生涯にわたって音楽に親しむ態度を育てていく。

6.5 『アイダ』の場合

第2部第2場の「凱旋の場」と第4幕第2場の「大地よさらば」が、やはり教材として適している。

この作品は、ファラオの治世した古代エジプトを描いている。歴史的分野の「四大文明」、地理的分野の「アフリカ」と一緒に学べば、映像が重なる。考古学者オギュスト・マリエット(1821-1881)は、発掘作業中(1870)に発見した一組の男女の遺体をもとに原案を作った。それゆえ、壮大なロマンの広がる作品である。

6.6 『蝶々夫人』の場合

第2幕第1場の「ある晴れた日に」と第2幕第2場の「いとしい子よ、さよなら」を選んだ。蝶々夫人の「ある晴れた日、遠い海のかなたに」と日本語訳のメロディは口ずさみやすい。

1890年代の長崎、没落士族の娘の悲劇である。歴史の教科用図書には書かれない裏側の話である。版籍奉還(1869)により、藩士だった者が失職した。

当時の日本女性の描かれ方、日米の国民性、欧米の人々から日本はどのようにみられていたかがわかる作品であり、国際理解の教材となる。

6.7 『カルメン』の場合

第2幕の「闘牛士の歌」と第4幕の「いた、俺だ。ああ、カルメン」を選んだ。闘牛士の歌う「トレアドル進め、トレアドル」などの有名なアリアには、

音楽科の教科用図書に日本語訳詞を記す。わずか4小節であっても、「歌詞の内容や曲想を味わう(略)」²³材料になる。スペインの民俗舞踊のフラメンコが表現され、その国の雰囲気伝わる。

奔放な生活は「社会の秩序と規律を高める(略)」²⁴という逆説の教訓を含む。

6.8 『こうもり』の場合

第2幕の「われら皆、兄弟姉妹」と第3幕の「シャンパンの泡のせい」を選んだ。

「それぞれの個性や立場を尊重し、(略)、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ」²⁵のである。そして、人間関係をよくする、ストレスを解消させてくれるウィнна・ワルツを踊り、シャンパンのせいにしてしまふ、ドイツ語圏の文化に触れることができる。

7. おわりに

オペラは、音楽(歌・合唱・オーケストラなど)、演劇(演出)、文学(台本)、美術(舞台装置・衣装)、舞踊などさまざまな要素をもつ総合芸術である。色々な角度から楽しめる。演出により、『アイダ』が歌舞伎に、『カルメン』がバレエに、『魔笛』が映画になる。

昨今の金融危機のなかで補助金が減らされ、欧州の歌劇場でも運営が難しいという。オペラ上演は政治や経済と深く結びついている。採算と芸術をどう両立させるか。「演出を簡素にする代わりに社会・政治批判を盛り込んで観客に訴える、(略)、歌手や指揮者ではなく、演出家が制作意図を的確に観客に伝えられているかに力点を置く」²⁶ようになってきた。オペラは同じ演目であっても、演出する人によって発信するテーマは微妙に変化する。

オペラ作品は通しで3時間前後の上演時間である。初心者があらすじも知らず観れば、字幕ばかりみて感動は半減する。「言語は左脳、音楽は右脳が主役」といわれるように、音楽そのものに集中できなくなる。劇場に観に行くときは、あらすじと背景は予習していききたい。

DVDは予習に適する。METライブビューイングや、オペラフェスティバル「イタリアオペラ名作の森」へ、洋画を観に行くように行かなくても、DVD

さえあれば、劇場のない地方の学校でも、自宅でも観ることができる。

学校で観るオペラは選曲や場面に注意を要する。仮に「文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解」し、「道徳性を養う」ことができたとしても、演出により、水浴や抱擁などの娯楽的要素や殺人などの心理描写と、中学生に見せたくない場面も少なくない。時間的余裕もないけれど、興味の有無や集中力から考察し、いきなり全曲の鑑賞は中学生に無謀である。だから、「どこかで耳にしたメロディ」が入り、薄幸のヒロインや、格好いいヒーロー的な王子さまに感情移入しやすい場面を選び20分以内にする。

あらすじや創作された背景、物語の時代や場所の地図や年表、教訓などを記したDVDのない場合は、あらすじだけ一言にする。「(略)、根拠をもって批判するなどして、音楽のよさや美しさを味わう」²⁷指導に専念したいからである。鑑賞後に感想を文章にまとめると、1コマ50分の授業の中でオペラに親しんでいく態度を育てられる。DVDは観たい場面をすぐ映し出せ、一時停止や早送りもできるので、教材として活用するのに向いている。

表4. 単品で入手できるDVDと対訳本

作曲家	作品名
モーツァルト	フィガロの結婚、魔笛、ドン・ジョヴァンニ コシ・ファン・トゥッテ、後宮からの誘拐
ロッシーニ	セビリアの理髪師
ワーグナー	ローエングリン、ラインの黄金、 ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏
オッフェンバック	ホフマン物語
ヴェルディ	椿姫、アイダ、ドン・カルロ
Jシュトラウス	こうもり
ビゼー	カルメン
チャイコフスキー	エフゲニー・オネーギン
プッチーニ	トゥーランドット、蝶々夫人、トスカ、ボエーム
Rシュトラウス	ばらの騎士、
レハール	メリー・ウイドウ

(小学館、世界文化社などのHPより作表)

表4は、教科用図書に掲載されているオペラの中で、日本語字幕付き全曲DVDと対訳本が単品4000円以下で簡単に入手できる演目を調べ、作表したものである。学校で一部を学習し、鑑賞する礎を身につけたならば、興味のある生徒はDVDを個人で入手し、全曲鑑賞するかもしれない。他の作品も対訳本で予習し全曲鑑賞できる。また、機会さえあれば、劇場に観に行く可能性もある。

オペラ鑑賞の現在の観客は中高年が中心であり、今後、高額なチケットを入手し観に行くのは減少していくと予想される。自宅で映像オペラの鑑賞をする者も増えるだろう。そこで、オペラ鑑賞の普及のためには、若年層の開拓が不可欠である。オペラ愛好家には、欧米在住時に本場のオペラに感動した者や、音楽学校出身者が多い。誰かから鑑賞方法を教えられている。「(略)音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」ため、全員が学べる最後の時である中学校第2学年及び第3学年を中心に鑑賞指導を想定したのである。

「仕事や勉強による疲れは、左脳の酷使による」²⁸ことから生じる。そのとき、イメージの浮かびやすい曲をのんびり聴くのがよい。オペラはストーリーがあるので、一度映像を観れば、頭の中で映像化、イメージしやすい。また、愛の表現の多いオペラは、人間関係を円滑にする効果もある。

オペラは「聴くオペラ」から、演出家が制作意図を観客に伝える「考えさせるオペラ」へとなりつつある。映像オペラは、映像により背景がわかり、国際理解や道徳も身につけながらどこでも楽しむことができる。ただ、選曲と場面設定は生徒たちの興味と発達段階を考慮する必要がある。

CD鑑賞が中心だった学校教育に、映像による一部疑似体験を取り入れ、生涯にわたって親しむ態度を育てていく。それゆえ、文化芸術の鑑賞活動、オペラ鑑賞の普及のために、「学校教育での映像オペラの活用」を提言するのである。

注

- ¹ 「MET ライブビューイング」
<<http://www.shochiku.c.jp/met/>> (2009.6.4)。
- ² 「藤原歌劇団V S 二期会」
<<http://www.tc5810.fc2web.com/operat/hujiwaravsnikikai.htm>> (2009.5.9)。
- ³ 「関西歌劇団」
<<http://www.geocities.jp/kaps01feb06/recitateiki.html>> (2009.5.4)。
- ⁴ 根木昭「わが国におけるオペラ政策の現状と課題」『昭和音楽大学舞台芸術センター公開講座＝オペラ劇場運営の現在』(2003.3.9)、79頁。
- ⁵ 「わが国におけるオペラ政策の現状と課題」同上、81頁。
- ⁶ 『中学校学習指導要領』文部科学省、平成20年3月告示、76頁。
- ⁷ 同上、75頁。
- ⁸ 山田治生『一冊でわかるオペラガイド126選』成美堂出版、2007年3月10日、32頁。
- ⁹ 山田治生『一冊でわかるオペラガイド126選』成美堂出版、2007年3月10日、32頁。
- ¹⁰ 『中学校学習指導要領』、31頁。
- ¹¹ 同上、112頁。
- ¹² 同上、113頁。
- ¹³ 同上、74頁。
- ¹⁴ 同上、「小学校学習指導要領の部」、207頁。
- ¹⁵ 同上、112頁。
- ¹⁶ 同上、「幼稚園教育要領の部」、155頁。
- ¹⁷ 同上、「小学校学習指導要領の部」、206頁。
- ¹⁸ 同上、「小学校学習指導要領の部」、208頁。
- ¹⁹ 同上、「小学校学習指導要領の部」、209頁。
- ²⁰ 同上、74頁。
- ²¹ 同上、75頁。
- ²² 同上、76頁。
- ²³ 同上、76頁。
- ²⁴ 同上、113頁。
- ²⁵ 同上、112頁。
- ²⁶ 『日本経済新聞』2009年4月26日、12版、第30面「殴州歌劇場に資金難の冷風」
- ²⁷ 『中学校学習指導要領』、76頁。
- ²⁸ 品川嘉也『右脳クラシック鑑賞法』丸善メイツ、1990年5月31日、34頁。

参考資料

- A (書物に関するもの) 10冊
- ・大田黒元雄『歌劇大観上』音楽之友社、(1970)
 - ・大田黒元雄『歌劇大観下』音楽之友社、(1970)
 - ・加藤浩子・守山実花『オペラを聴くコツ、バレエを観るツボ』学習研究社、(2006)
 - ・品川嘉也『右脳クラシック鑑賞法』丸善メイツ、(1990)
 - ・根木昭「わが国におけるオペラ政策の現状と課題」『昭和音楽大学舞台芸術センター公開講座』(2003)
 - ・畑中良輔『中学生の音楽2・3上』教育芸術社(2009)
 - ・同上『中学生の音楽器楽』
 - ・山田治生『一冊でわかるオペラガイド126選』成美堂出版、(2007)
 - ・湯山昭『新編新しい音楽6』東京書籍(2009)
 - ・『中学校学習指導要領』文部科学省、(2008)
- B (ビデオ・DVDに関するもの)
- ・歌劇『アイーダ』DVD、ロリン・マデール指揮、スカラ座管弦楽団・合唱団(1985上演のライブ)
 - ・歌劇『ウィリアム・テル』DVD、リカード・ムッティ指揮、スカラ座管弦楽団(1988上演のライブ)
 - ・歌劇『カルメン』DVD、アラン・ロンバール指揮、アレーナ・ディ・ヴェローナ管弦楽団・合唱団(2003上演のライブ)
 - ・歌劇『こうもり』DVD、カルロス・クライバー指揮、バイエルン国立歌劇場管弦楽団・合唱団・バレエ団(1987上演のライブ)
 - ・歌劇『蝶々夫人』DVD、ロリン・マゼール指揮、スカラ座管弦楽団・合唱団(1986上演のライブ)
 - ・歌劇『魔笛』DVD、アルノロ・オストマン指揮、ドロットニングホルム宮廷劇場管弦楽団(1989上演ライブ)
- C (webに関するもの)
- ・「関西歌劇団」
<<http://www.geocities.jp/kaps01feb06/recitateiki.html>> (2009.5.4)
 - ・「藤原歌劇団V S 二期会」
<http://www.tc5810.fc2web.com/operat/hujiwaravsnikikai.htm>> (2009.5.9)
 - ・「MET ライブビューイング」
<<http://www.shochiku.c.jp/met/>> (2009.6.4)

(Received:September 30,2009)

(Issued in internet Edition:November 1,2009)